

『マトリックス』 原題 The Matrix 1999



映画批評

『マトリックス』 原題: The Matrix 1999

～ ネオという名の伝説的なハッカーは別の顔を持つ

塚田三千代 (翻訳家・映画アナリスト)

©m.tsukada

映画のスクリーンはコンピュータの緑色のプログラム・コードの数列が雨の落ちてくるような映像ではじまる。本映画はちょうどコンピュータ 2000 年問題が浮上して世間の関心事になっていたこともあり、タイミングよく劇場公開されて大ヒットした。

120 台もの高性能カメラを一斉に使い、アニメ手法で撮影した連続シーンは、これまでにない初めての視覚効果。たとえばモーフィアスがネロに伝授する高速反応の回転技、不死身のエージェントと戦うネオやトリニティーの動作反応の早技、等のシーンは驚異たるものである。

主人公トーマス・アンダーソンはネオという名で伝説的なハッカーとして別の顔を持ち、ソフトウェア会社ではプログラマーとして働いている。ある夜、パソコンに送られてきた不可解な”Follow the white rabbit.”というメッセージに導かれ街に出て、トリニティーというミステリアスな女性と出会う。彼女から”You’ re in danger. --- They’ re watching you, Neo.”と警告を受ける。翌日、ネオはエージェントに拘束されて拷問をうけるが、トリニティーに助けられ、エージェントが標的とするモーフィアスという人物のところへ連れて行かれる。

彼からマトリックス(仮想現実の世界)について聞かされ、渡された赤いピルを飲む。そしてネオは恐ろしい真実を知ることになる。現実の世界と信じていた 1999 年は、人工知能(A.I.)が創造した仮想現実の世界、つまりマトリックス。実際は、今は 2199 年頃と知らされる。「現実の世界」(the real world)は「実在の砂漠」(the desert of real)にしかすぎず、人類は A.I.によってカプセルの中で培養され、電氣的ショックにより、夢(仮想)の世界で生活している、という事実。

モーフィアスとその仲間は電話回線を使って、ネブカドネザル号(ホバークラフト)の船内とマトリックスを行き来できる。彼らはネオこそが待ち望んでいた「救世主」と信じ、ネオに様々なプログラムで訓練をさせる。ネオは訓練を終え、彼らと共に予言者オラクルに会いに行く。しかし、ネオを見たオラクルは、彼は救世主ではないと告げる…。



## 映画のセリフ

本映画の英語表現は日常生活での会話表現をこえる多様な語彙が出現している。文型は中学・高校で既習するレベルである。話すスピードも普通かややゆっくりである。内容が普通の日常生活から離れた世界や考えであるので、これを前提としてこの映画と向きあえば、よりいっそう親しめて良き英語学習ができるでしょう。

会話シーン1 SP p.18 より

NEO: That was you on my computer. How did you do that?

TRINITY: Right now, all I can tell you is that you're in danger. I brought you here to warn you.

NEO: Of what?

TRINITY: They're watching you, Neo.

NEO: Who is?

TRINITY: Please, just listen.

会話シーン2 SP p.52 より

NEO: A.I.? You mean artificial intelligence?

MORPHEUS: A singular consciousness that spawned an entire race of machines. We don't know who struck first; us or them. But we know that it was us that scorched the sky. At the time they were dependent on solar power and it was believed that they would be unable to survive without an energy source as abundant as the sun. Throughout human history we have been dependent on machines to survive. Fate, it seems, is not without a sense of irony.

## 【映画史リテラシー】

●言語: 英語

●【関連事項】 関連映画

『マトリックス』(The Matrix, 1999)は3部作として完結する。本映画は『マトリックス リローデッド』(The Matrix Reloaded, 2003)、『マトリックス レボリューションズ』(The Matrix Revolutions, 2003)の三部作(trilogy)の第一作目である。

人間がコンピュータに支配されるというコンセプトは、『2001年宇宙の旅』(2001: A Space Odyssey, 1968)や『ブレードランナー』(Blade Runner, 1982)ですでに描かれている。夢の世界と現実の世界が曖昧なところは『トータル・リコール』(Total Recall, 1990)、『インターセプション』(Interception, 2010)などである。

●『マトリックス』(The Matrix, 1999)の素材

『不思議の国のアリス』(Alice's Adventures in Wonderland, 1865)、『オズの魔法使い』(The Wonderful World of Oz, 1900)、『聖書』、『ギリシャ神話』からの引用がみられる。さらにサイバーパンク小説や理数系の理論等からの引用も数多く取り入れて巧みに融合させ、独特の世界を創り上げている。例えば、ヒロインの名前「トリニティ」はキリスト教では「三位一体」を表す。モーフィアス達の基地である「ネブカドネザル」は旧約聖書に登場するバビロニア国王の名前である。

サイバーパンク(cyberpunk)小説について補足すると、ウィリアム・ギブソン(William Gibson, 1948-)の長編小説「ニューロマンサー」(Newromancer, 1984)がSF小説の3冠賞(ヒューゴー賞、ネビュラ賞、フ

イリップ・K・ディック賞)を受賞したことで、史上初めて「世界がコンピュータ・ネットワークによって支配される未来社会を描く SF ジャンル」をサイバーパンク小説として位置づけられるようになった。

●SCREENPLAY 名作映画完全セリフ集『マトリックス

●ウィリアム・ギブスン. 翻訳:黒丸尚 1984.「ニューロマンサー」. ハヤカワ文庫 SF

サイバーパンク小説(the cyberpunk genre).SF の3冠賞—the Nebula Award, the Philip K, Dick Award, the Hugo Award を受賞。William Gibson の第1作目の小説。

Official Website: <http://www.williamgibsonbooks.com/books/neuromancer.asp>

●【登場人物】

ネオ(トーマス・A・アンダーソン):表向きは、大手ソフト会社のコンピュータープログラマー。裏の顔は数々のコンピュータ犯罪を犯していたクラカー。

モーフィアス: 伝説的なハッカー。仮想世界の中では最も危険なテロリストとされる。

トリニティー:ネブカドネザル号の副船長。黒髪のショートカットの美女。国税局のコンピュータに侵入した凄腕ハッカー。ネオの案内役としてネオをモーフィアス会わせる。

サイファー(レーガン):ネブカドネザル号のメンバーを裏切ってエージェントと内通。

タンク:ネブカドネザル号のオペレーター

ドーザー:タンクの兄

マウス:マトリックスの事を説明する訓練プログラムを書いた。“赤いドレスの女”は彼の自慢。

[映画情報]

第 72 回(米)アカデミー賞の 4 部門(編集・音響・音響効果・視覚効果)でオスカー像を受賞

監督:ラリー・ウォシャウスキー /アンディ・ウォシャウスキー

脚本:ラリー・ウォシャウスキー /アンディ・ウォシャウスキー

製作:ジョエル・シルバー

出演者:

キアヌ・リーブス /ローレンス・フィッシュバーン /キャリアー＝アン・モス /ヒューゴ・ウィーヴィング /ジェイダ・ピンケット＝スミス

配給:ワーナー・ブラザーズ

136 分

製作国:アメリカ

©Sony Pictures Entertainment. Co



---

谷川建司（映画ジャーナリスト）

◆ 主役ネオを演じて、冴えを極めたキアヌ・リーヴス

『スピード』(94)によって世界的な人気スターの座を掴んだキアヌ・リーヴスは、だがしかし、その後順風満帆でキャリアを伸ばしてきたとは言えない。というよりも、人気スターとしてのポジションを維持していくということに、彼自身が明確に拒絶の意思を示してきたと言った方が良さそう。その最たる例と言えるのが、彼が自らのブレイク作品の続編である大作『スピード 2』(97)への出演を断って、代わりに『死にたいほどの夜』(96)という低予算のインディペンデント映画への出演、しかも主役ですらなく主人公の友人という小さな役を選んだという事実だ。

ちょうど『スピード』の日本公開の時、キャンペーンで来日した彼にインタビューしたことがあるが、この時彼は既に自らの役柄選択の確固たるポリシーを語ってくれていた。それは、 “スター” でいることに固執するよりも“アクター” としてやりたい役柄を優先し、この監督や俳優と一緒に仕事をしてみたい、という。

“アクター” としての本能に忠実でありたいというごくシンプルなものだった。だが、そのシンプルなポリシーというものは、いざ実行してみようと思うと案外と難しいものに違いない。というのも、ハリウッドでは俳優の商品価値というのは常に一番最近の作品での興行成績に基づいて判断されるわけであり、メジャーな作品に出演し続けなければスター・ヴァリューを維持することは難しいからだ。

彼は、人気スターになってしまった後でも、主役だけでなくかつて演じた『殺したいほどアイ・ラブ・ユー』(90)のジャンキー役のようなビザールな役柄を演じることも続けたいと思うか？ という僕の問いに対しては「もちろん、どちらもやっていきたい。ただし『スピード』のヒ

ットのせいで世間が僕を見る目が変わってしまったことは確かなので、もう脇役のオファーは来ないのでは?という不安はある」と答えたものだ。

『スピード』以降のキアヌの出演作品を見てみると、主演スターとしては『チェーン・リアクション』(96)のようなアクションもの、『雲の中で散歩』(95)のような文芸もの、アル・パチーノと共演したオカルト映画『ディアボロス』(98)等があり、また(得意な)ビザールな脇役路線としても『カウガール・ブルース』(94)などがあったが、彼の俳優としての魅力を全開させるだけのものとはなかなか出会ってこなかったと言える。

その意味で、『マトリックス』はメジャーの大作映画であると同時にインディペンデント・スピリット溢れるウォシャウスキー兄弟(姉妹)の監督作品でもあるという点において、まさしくキアヌが探し求めていた企画、彼が求め続けていた役柄と言えるのではないだろうか。その証拠に、『マトリックス』はキアヌにとって本当に『スピード』以来久しぶりの超大ヒットになったのみならず、既にパート2、パート3の同時製作という形での続編の製作に入っており、もちろん今回はキアヌがすべて主演を務めることになっている。

(©2000 谷川建司)

---

区切線

© 2013 m.tsukada. All Rights Reservd.